

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00752

研究課題名（和文）総合ドイツ語授業における継続的発音指導に向けた発音シラバス策定と教材の開発研究

研究課題名（英文）Research on the formulation of a pronunciation syllabus and the development of teaching materials for continuous pronunciation teaching in German classes.

研究代表者

中川 純子（Nakagawa, Junko）

お茶の水女子大学・外国語教育センター・研究協力員

研究者番号：80645961

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：発音教育の改善に向けて、ドイツ語教育の課題を明らかにし、かつ実践に向けて教師を支援する方法論の開発を目指した。教師へのインタビュー分析から、発音の役割を多面的に認識している教師は発音教育に意欲が高いことが示され、教師の動機付けが発音教育改善の重要事項であるという結論が導き出された。教師の動機付けに繋がり、かつ学習者を自律に導く方法については、授業実践を通じて開発研究を行った。その際、発音の評価・テストに注目し、学習者の発音そのものを評価するのではなく、自律学習のプロセスを評価する方法論を構築し、結果として学習者の動機付けや発音そのものの向上にもつながるといった結果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツ語教育においては、発音シラバスや授業用教材はもとより、発音教育の意義についての議論もほとんど行われていなかった。本研究では発音に対する教師の意識調査をインタビュー形式で行い、発音教育に対する意識の形成背景、そして教師の動機付けと授業実践の関係を明らかにした。この結果を受け、教師を発音教育に動機付け、支援する方法について考察し、実験的に授業で実践を行った。その際、とりわけ発音の評価法について「代替評価」の観点から新しい提案を行った。発音の評価に代替評価を取り入れたのはパイオニア的な試みである。実践研究によって一定の成果を得たことからWebサイトを通じてツールの公開を行なっている。

研究成果の概要（英文）：The aim of the study was to develop a methodology to support teachers in improving pronunciation teaching, both to identify issues in German language teaching and to support teachers in the real world. The analysis of interviews with teachers showed that teachers who are aware of the multifaceted role of pronunciation are highly motivated in pronunciation teaching, leading to the conclusion that teacher motivation is an important factor in improving pronunciation teaching. Methods to motivate teachers and lead learners to autonomy were developed and researched through classroom practice. In doing so, attention was paid to the evaluation and testing of pronunciation, and a methodology was developed to evaluate the process of autonomous learning rather than the learners' pronunciation itself, which resulted in motivating the learners and improving pronunciation itself.

研究分野：教授法、発音教育

キーワード：発音教育 教材開発 ドイツ語教育 オンライン教材 E-ラーニング

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2013 年から始まった日本語母語話者のドイツ語発音の自律学習を支援する教材開発研究の継続課題である。これまでの成果を教材の形として出版(立川・中川「ドイツ語発音発話徹底ガイド」2019 郁文堂)し、関連ウェブサイト(URL: <https://fit-aussprache.com>)をドイツ語と日本語の2言語で2019 年春から暫定的に公開を始めた。研究結果には一定の評価が得られたが、総合ドイツ語の中で発音を継続的に扱うには想定していた以上に問題が多岐に渡っていることが明らかになった。他言語の発音教育についての先行研究でも同様の問題が指摘されていたことから、ドイツ語教育のみならず、外国語教育研究全体の知見に学び、総合ドイツ語へ発音学習を組み入れるため、残された問題を解決することが課題となった。

2. 研究の目的

発音が十分に扱われない理由については、先行研究の指摘は大きく3つに分けられる：伝統的な外国語教育では発音教育が軽視され、教える教師自身に発音教育のイメージがない上、教材にもほとんど扱いがたいなど、教師を導く指針がないという問題、発音学習特有の指導の難しさの問題、発音教育の目的設定の難しさとそれに伴う評価不在の問題である。本研究においては発音学習を継続して授業に組み込むことに向け、現状の中でとりわけ現場の教師を支援することでこれら問題を解決する方法の構築を目指す。まず発音教育を現実的なものとするために教師を動機づけるものは何かを明確化し、評価の問題に取り組むとともに教育活動全体を支える教材についての研究を行う。

1) 教師を発音教育に動機付ける発音を学ぶ意義とは何か：発音教育について、欧州で学習指針の標準となっている CEFR は handlungsorientiert(行為志向)を掲げているが、発音のどのような要素がパフォーマンスの成功に繋がるのか、どの程度ならば良いと言えるのか、具体的な学習目標や評価の方法などは挙げられていない。これまでの研究において、発音学習には学習者よりもまず教師の意識が重要(千 2017 他)であり、優れた教材が提供されても指導の目的や、目標に達するための指導法が具体的でなければ教師への動機付けが難しく、効果的な学習にも繋がらないことが指摘されている。本研究では教師を発音教育に動機づけるものを明らかにするためにドイツで教える様々な背景を持ったドイツ語教師の意識調査を行う。渡辺・松崎(2014)は被験者を用いた実験で、立場による評価傾向の違いを明らかにしており、本研究でも背景や立場の異なる人間の観点からの見解・経験を比較考察し、発音教育に意識の高い教師がどのように動機付けされたかについて考察を深める。

2) 評価方法の提言：音声の専門家ではない教師や非母語話者教師が自身の発音や聴解力を問われることなく、かつできるだけ客観的な基準で学習者の発音評価を行える方法を導き出す。被験者を用いた評価実験を行い、最終的に評価方法モデルを提案する。

3) シラバスの策定と教材開発：現在公開している専用ウェブサイトを拡大し、副教材および評価活動に必要な素材をダウンロードして利用できるようにするなど E ラーニングへのさらなる対応を目指す。副教材の作成にはタスク達成などアクティブ・ラーニングの手法を取り入れ、発音をパフォーマンス成功の一要素として組み入れる。

3. 研究の方法

1) について：本研究では、教師を動機づけるものを明らかにするために、現地で実際に学習者を指導している教師から知見を得るために、インタビューを通じて意識調査を行う。被験者を用いた意識調査には内藤哲雄(2002)が開発した PAC 分析インタビューの手法を用いる。PAC 分析インタビューとは個人別態度構造を分析するための手法で、刺激文から被験者がイメージした複数の連想語を統計解析ソフトにかけ、樹形図を作成した上で、その樹形図を見ながらインタビューが行なわれるものである。従来のインタビュー調査では、あらかじめ設問が設けられているなど、調査者が聞きたいことについて回答を得るもので、質問文の聞き方や選択肢の数や内容などによって答えが影響される傾向が避けられない。PAC 分析インタビューは調査者が聞きたいことを聞くのではなく、被験者に語りたいことを語らせるために開発されたインタビュー手法であり、調査者の影響が最小限に抑えられ、被験者の意識を深く探ることができるとされる。

2) について：本研究では、ドイツで出版されているドイツ語の総合教材、および発音学習教材の主なもの(CEFR A1・A2 レベル)について、教材の掲げる目的、練習方法、評価方法または評価に対する見解を参照し、発音評価の可能性と限界を明らかにする。さらに近年注目を集める学習評価である「代替評価」の考え方を取り入れる。代替評価とは、試験では測ることが難しいとされる、言語を用いた課題遂行能力や学習過程における様々な気付きや学びを把握するための評価の方法のことを指す(文化庁 2020)。本研究ではこの理念に依拠し、教師支援の見地から新たな発音の評価方法の構築を行う。

3) について：技術的なことに関してはこれまで依頼してきた専門家と協力し、コンテンツの設計については授業実践からフィードバックを受けながら最適な形を探す。1)2)3)の成果からシラバスを策定する。

4. 研究成果

1) ドイツで教鞭をとる被験者3名の教師にインタビューし、PAC分析(内藤哲雄2002)の手法により分析を進めた。結果として教師の意識は発音が悪いことの不利益の認識、目的意識、そして教育実践の3要素にまとめられ、これらは相互に密接に影響しあっていることがわかった。そして目的意識や教育実践の根本にあるのは、発音が悪いことによる不利益の認識であること、それが教師としての発音教育の動機付けになっていることが明らかになった(図1:出典 中川・服部2022)。このことから、発音教育の改善には学習者のみならず教師に対する動機付けは欠かせないものであることが示された。動機付けの中心は、多岐にわたる発音の役割の意識化である。誤解される、話の内容に集中してもらえない、など目に見える不利益の他、発音の問題とは一般に気づきにくいような不利益があることもわかった。例えば相手に聞き取りのストレスを与えていることが相手の不快な対応となって返ってくるということ、あるいは非母語話者の感情は発音によって誤解される可能性があるということである。さらに社会から受け入れられるために発音を学ぶという側面も繰り返し語られた。発音の持つ社会的側面は、その社会の中に身を置かなければわかりにくいものである。そしてまた、学習者が未知の単語に出会った時にも正しく発音できるように、調音規則を教え、簡単で身近なトレーニング方法を身に付けさせることも発音教育の目的とされた。これは学習者の自律にもつながる。

2) 教師の負担軽減になり、かつ学習者を自律に導く実践方法は、授業実践を通じて検証を行った。具体的には、効果的な評価方法は学期を通じた発音学習全体の改善に結びつく、という先行研究の「波及効果」の理念に基づき、まず評価法の開発に重点を置いた。この実践方法ならびに評価法の開発については、研究を始めた2020年からコロナ禍にみまわれ、大学のみならず、学習者個人、家庭のネットワーク化、オンライン化、デジタル化が一気に進んだことで、当初の計画や時間の見込みが軌道修正を余儀なくされた。全体としては、パフォーマンスの成功の一環としての発音という側面が強くなり、学習スタイルとしては最初の研究計画よりさらにネット環境を利用したE-ラーニング寄りのものになった。現在まだ検証途中ということになってしまったが、インターネットを利用し、デジタル教材を中心に据えたことで、国内のみならず海外のドイツ語教師にも利用可能な汎用性のあるものになっている。現段階で大学のドイツ語授業で実際に導入したのは、次のとおりである。

a) 発音課題：自主制作のウェブサイトにあるテキストから気に入ったものを選び、オンライン学習教材を用いて練習する。録音したものを授業ポータルサイトにあげる。その際に、自分の学習を振り返る「ワークシート」も提出する。

b) 口頭試験：Deutsche Welleのウェブサイトからショートストーリーを選び、ペアで会話を練習する。口頭試験では、そのビデオを無音で流し、会話をペアでアフレコする。自分の学習を振り返る「ワークシート」、ビデオテキストのスク립ト、並びにその日本語訳を提出する。評価は提出物と口頭試験の実演に対して行ったが、基本的に発音を評価するのではなく、「ワークシート」の提出、口頭試験への参加を評価した。つまり個別具体的な発音の良し悪しを評価す

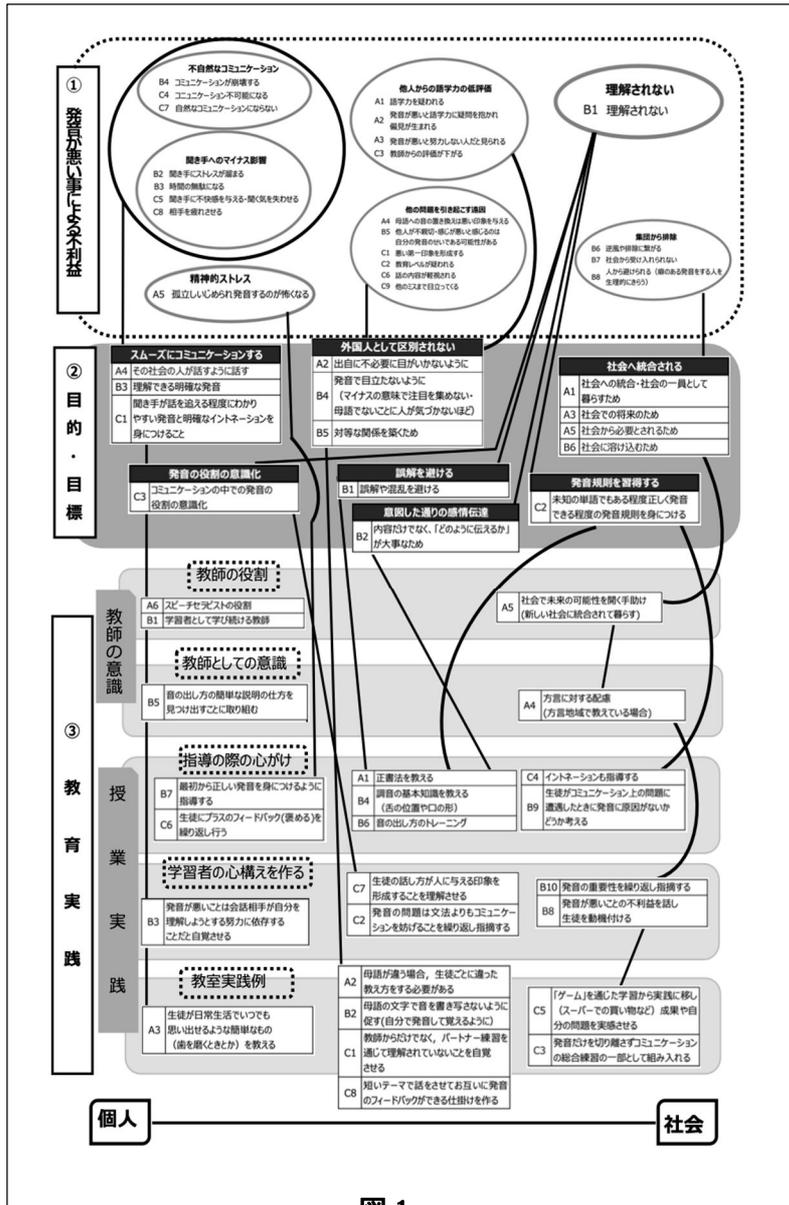


図1

ることをしなかった。発音の向上を目指した授業において「発音」ではなく「自律学習」の記録や参加を評価するという「代替評価」の理念に則った新しい試みであり、この方法で発音の力は伸びるのか、また学習者の動機付けはどうかだったが問題となる。

学習者の提出したワークシートを川喜田二郎(1970)の開発した KJ 法で分析し、さらに新倉真矢子の(2013)の発音学習ストラテジー、並びに Alderson & Wall (1993)の「波及効果」に従って分析した結果、肯定的な「波及効果」が得られていることがわかった。(図2：出典 Nakagawa 2024)

現段階で、肯定的な成果が出ているものの、発音学習の評価において発音を直接評価せず学習プロセスや参加を評価するという方法がどれだけ有効性・汎用性を持つのか、今後さらに検証を進めていきたい。

3)教材の発信に関しては、ウェブサイトの他、2021年からYouTubeチャンネルを開設し、モジュール式教材として、1回の所要時間を最大10分とし、分節素、超分節素の枠組みを取り扱った自律学習向け動画シリーズを展開した。授業実践は基本的にこの二つのサイトによる発音練習、聞き取り、発音に対する理解の促進を基盤にしているため、コンテンツについては実践からのフィードバックを得て、今後とも改善していく予定である。

シラバスに関しては、2020年からのコロナ禍によって大きく研究進度、開発教材内容に影響を受けたため、研究年度内に最終的な形を出すに至らなかった。ただし、基本的な枠組みはできているので、半期、または一年の実践を経て最終的なまとめを行う予定である。

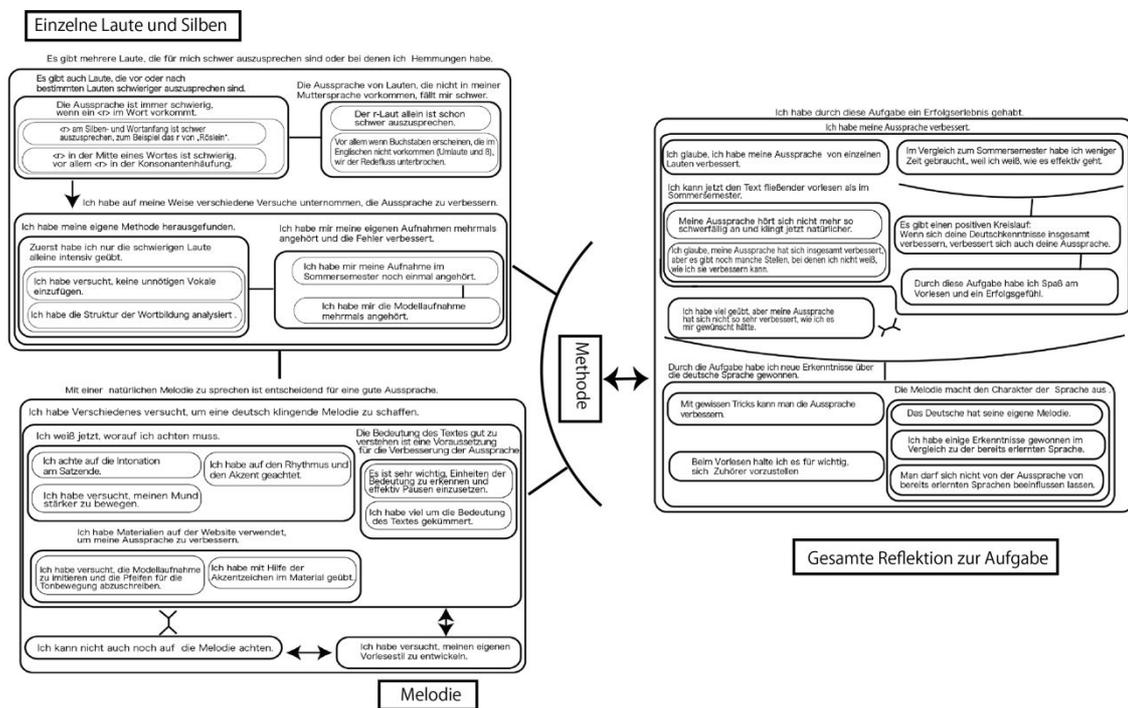


図2

< 引用文献 >

Alderson & Wall, Does Washback Exist? In: *Applied Linguistics*, Volume 14, Issue 2, June, 1993, 115–129

Nakagawa, Junko, Unterrichtspraxis mit selbstentwickelten digitalen Materialien für die Aussprache des Deutschen – Drei Elemente, die das Aussprachelernen fördern. In: Tagungsband zum 8. Bremer Symposium, 2024 (印刷中)

千仙永「日本語音声教育の変遷・課題・展望 - 日本国内における教師教育に着目して」『早稲田日本語教育学』第22号、2017、41-60

川喜田二郎、『続・発想法 KJ法の展開と応用』中公新書、1970

内藤哲雄、『PAC分析実施法入門[改訂版]「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版、2002

中川純子、服部真子「学習者の将来につながる発音教育のあり方とは-PAC分析を用いたドイツで教える非母語話者ドイツ語教師のインタビューから-」『ドイツ語教育』26号、2022

新倉真矢子、音声学習ストラテジーを用いた音声教育、『ドイツ語音声教育の現状と可能性』、2013、2-13 .

渡辺裕美・松崎寛、発音評価の相違 日本人教師・ロシア人教師・一般日本人の比較、『日本語教育』159巻、61-75

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 中川純子、服部真子	4. 巻 26
2. 論文標題 学習者の将来につながる発音教育のあり方とは - PAC分析を用いたドイツで教える非母語話者ドイツ語教師のインタビューから -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『ドイツ語教育』	6. 最初と最後の頁 44-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川 純子, 長松谷 有紀, 坂井 菜緒, 服部 真子	4. 巻 4
2. 論文標題 日本語教育における発音学習の意義 3人の教師の PAC 分析インタビューによる内省から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『PAC分析研究』	6. 最初と最後の頁 27-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Junko Nakagawa	4. 巻 1
2. 論文標題 Entwicklung der digitalen Materialien fuer Aussprache und Sprechausdruck des Deutschen " : zur Optimierung der Ausspracheschulung im Deutschunterricht	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Elektronische Dokumente Universitaet Bibliothek (Goethe Universitaet Frankfurt am Main)	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21248/gups.57598	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 0件/うち国際学会 12件）

1. 発表者名 Junko Nakagawa
2. 発表標題 Entwicklung digitaler Materialien fuerr Ausspracheschulung und eine lernkulturbezogene Methode
3. 学会等名 Die GETVIC024, Goethe-Institut. (Online Konferenz durch ZOOM vom 19-20.10) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Junko Nakagawa
2. 発表標題 Unterrichtspraxis mit selbstentwickelten digitalen Materialien fuer die Aussprache des Deutschen - Drei Elemente, die das Aussprachelernen foerdern
3. 学会等名 8. Bremer Symposion zum Fremdsprachenlehren und -lernen an Hochschulen (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中川純子、服部真子
2. 発表標題 日本語学習者と教師を支えるデジタル発音教材開発 - ウェブサイトを使った持続可能な発音学習の可能性
3. 学会等名 第34回日本語教師連絡会議 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Junko Nakagawa
2. 発表標題 Relevanz der Ausspracheschulung im Deutschunterricht Aus der Selbstreflektion der Lehrpersonen durch PAC-Analyse
3. 学会等名 Linguistisches Treffen in Wroclaw VIII (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Junko Nakagawa
2. 発表標題 Entwicklung von digitalen Lehrmaterialien fuer die Ausspracheschulung-zum nachhaltigen Aussprachelernen
3. 学会等名 Die GETVIC024, Goethe-Institut (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Junko Nakagawa
2. 発表標題 Relevanz der Ausspracheschulung im Deutschunterricht – dynamische Zusammenhaenge zwischen Sprachen und Identitaeten
3. 学会等名 OeDaF-Jahrestagung 2022 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Junko Nakagawa
2. 発表標題 Entwicklung digitaler Materialien fuer Aussprache und Sprechausdruck des Deutschen -zur Optimierung der Ausspracheschulung im Deutschunterricht-
3. 学会等名 Waehrend und nach der Corona: Digitale Lehre Germanistik (digitale Konferenz durch Webex-Meeting) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中川純子、服部真子、長松谷有紀、坂井菜緒
2. 発表標題 外国語学習において発音を学ぶ意義とは-海外で働く教師のPAC分析インタビューから-
3. 学会等名 第33回日本語教師連絡会議
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中川純子、服部真子
2. 発表標題 発音を学ぶことに対するドイツ語教師の意識構造-ドイツにおける非母語話者ドイツ語教師のPAC分析インタビューから -
3. 学会等名 第14回PAC分析学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Junko Nakagawa
2. 発表標題 Relevanz der Ausspracheschulung im Deutschunterricht Aus der Selbstreflektion der Lehrpersonen durch PAC-Analyse
3. 学会等名 Linguistisches Treffen in Wroclaw VIII (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Junko Nakagawa
2. 発表標題 Entwicklung von digitalen Lehrmaterialien fuer die Ausspracheschulung zum nachhaltigen Aussprachelernen
3. 学会等名 Die GETVIC024, Goethe-Institut (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Junko Nakagawa
2. 発表標題 Relevanz der Ausspracheschulung im Deutschunterricht-dynamische Zusammenhaenge zwischen Sprachen und Identitaeten
3. 学会等名 OeDaF-Jahrestagung 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Junko Nakagawa
2. 発表標題 Entwicklung digitaler Materialien fuer Ausspracheschulung und eine lernkulturbezogene Methode.
3. 学会等名 Die GETVIC024, Goethe-Institut. (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Junko Nakagawa
2. 発表標題 Unterrichtspraxis mit selbstentwickelten digitalen Materialien fuer die Aussprache des Deutschen - Drei Elemente, die das Aussprachelernen foerdern
3. 学会等名 8. BREMER SYMPOSION ZUM FREMDSPRACHENLEHREN UND -LERNEN AN HOCHSCHULEN (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Aussprache und Sprechausdruck des Deutschen https://www.youtube.com/channel/UCc3JuYEqLsew90aGjQUYYjQ Aussprache und Sprechausdruck des Deutschen https://fit-aussprache.com/de/vorwort ドイツ語発音の森 https://fit-aussprache.com Aussprache und Sprechausdruck des Deutschen https://www.youtube.com/channel/UCc3JuYEqLsew90aGjQUYYjQ ドイツ語発音の森 https://www.youtube.com/channel/UCv_61u2pj0bGMTwqZ67oybA
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------